

平成の「江戸参府」紀行

荒濱 茂

昨年の秋、東京にしばらく滞在することがあり、余暇を見て徳川家の廟所「増上寺」や赤穂義士の「泉岳寺」等を拝観参詣、其の後、越中先生から紀行文執筆の依頼があり、私なりに少しまとめてみました。

一 三緑山広度院「増上寺」 浄土宗(東京都港区芝公園)

徳川将軍家歴代の霊廟は、日光東照宮、東叡山寛永寺と増上寺。更に十五代慶喜公は谷中霊園にと夫々分祀されている。

始祖家康と三代家光の廟は「東照宮」に。二代秀忠、六代家宣、七代家継、九代家重、十二代家慶、十四代家茂の六人は増上寺御霊屋に。

四代家綱、五代綱吉、八代吉宗、十代家治、十一代家斉、十三代家定の六人は寛永寺に葬られている。「何故親子別々に」等の質問もあつたが此の事については次回に譲りたい。

増上寺敷地内の「徳川家霊廟」は非公開であるが在京中、知人の計いで拝観の許可をえた。戦前の敷地は広大な面積で増上寺大殿の南北(左右)に墓石は立ち並んでいて国宝に指定されていた。が、昭和二十年の戦災で北廟68棟と南廟28棟が被災。綱吉の生母「桂昌院」や家茂の正室で悲劇の皇女「静寛院和宮」の御霊屋もそのとき焼失している。戦後しばらくは御霊屋群は荒廃するにまかされていたが、東京タワーの建設とそれに伴う公園整備により、昭和三十三年から文化財保護委員会を中心となり、土葬であった御遺体は詳細な学術調査が行われたのち茶毘に付され、南北に分かれていた墓所は一ヶ所にまとめられ、現在地に「徳川将軍家廟所」と縮小改葬されていた。



堀部安兵衛の墓

三十三年から文化財保護委員会を中心となり、土葬であった御遺体は詳細な学術調査が行われたのち茶毘に付され、南北に分かれていた墓所は一ヶ所にまとめられ、現在地に「徳川将軍家廟所」と縮小改葬されていた。

入る。そのさきに行くと「浅野内匠頭」と同夫人の墓がある。

「内匠頭」の墓の一段下方に大石内蔵助以下四十七人の墓があるが、その配列は親子でも別々の位置にあり、身分や石高の高低に関係なく配置されている事に私は先ず疑問を抱いた。史(資)料を調べたところ「預けられた四家の大名屋敷で切腹した順番に墓は並んでいる」事実が判った。

元禄十五年(一七〇二)十二月十五日主君の無念を晴らした一行は、幕命により熊本細川家十七名、長府毛利家十名、松山久松家十名、岡崎水野家十名(寺坂を除き実数九名)と夫々預けられ、翌十六年二月四日それぞれ屋敷内で切腹を仰せ付けられている。実は墓の配列はその切腹の順番により並べられていたのであった。因みに細川家では大石内蔵助、久松家では長男の主税、毛利家では岡嶋八十右衛門、水野家では間十次郎、とそれぞれが一番目に切腹している。

次に戒名に「刃」「劍」の文字が入っている点では、直接上京の折り泉岳寺でお尋ねしたところ「中国の諺によつたもので、劍の刃の上を歩く、つまりあり得ない、成し得ない、ことを成し遂げた」という意味」との意である事を教えて戴いた。

また七十七歳といった最年長の堀部弥兵衛は菩提寺の「青松寺」宛に自分の戒名として「忠山院刃毛知劍居士」と書いた紙片を知人に拓しており、既に同志一同で戒名に「刃」「劍」を入れる申し合わせをした事が見受けられる。養子の「堀部安兵衛」の戒名は「刃雲輝劍信士」とある。

最後の「寺坂吉右衛門」の墓は、港区南麻布「曹溪寺」でも確認していたので、泉岳寺の墓とどちらに遺体が葬られている「実墓」か疑問に思っていた。

「寺坂」は「討入口上書」に名を連ねていたが、泉岳寺に至る前に大石、吉田忠左衛門からの説得により、義士の遺族らに討入りの経過説明のため脱出、其の後、元禄十六年六月大目付仙石伯耆守に、身分と事情を明かし自訴している。伯耆守は「一件は仕置きも終り落着いている」と放免。寺坂は一旦吉田忠左衛門の長女の嫁先に世話になっていたが「曹溪寺」に身を寄せ延享四年十月六日八十三歳で天寿を全うしている。「泉岳寺」のは供養墓で「曹溪寺」の「節庵了貞信士」が実墓である。

出典「徳川十五代将軍列伝」「増上寺御霊屋」「浅野内匠頭殿御家士敵一件」「堀内伝右衛門覚書」(古代山城研究会会員)

増上寺の表の顔とも云われている「三解脱門」(元和八年(一六二二)建立、国重文指定)、を潜ると背後の墓所に行き着くが、「三解脱門」の彼方に東京タワーが望みできたのは、時代の流れと違和感を覚えた。墓所門の青銅製の両扉には直径三十糎位の「三葉葵」の大紋が輝き、权威的拒絶感さえ感じ、これまで目にした大名家の墓所と格段の相違を見せつけられた思いがした。墓所宝塔の配置は左図のように相対的に配置されている。因みに関係者から「將軍は時代が下るほど虫歯が多かった」等の学術調査のエピソードも知らされた。

墓域は次のように配置されていた。

二代秀忠夫妻(石塔) 七代家継(石塔) 九代家重(石塔) 十二代家慶(石塔)
六代家宣夫妻(青銅) 十四代家茂(石塔) 静寛院和宮(青銅) 將軍生母と側室の合祀墓(石塔)

尚、本寺は始め明徳四年(一三九三)「西誉聖聰上人」によつて江戸貝塚(千代田区紀尾井町)に創建されたが、家康の江戸城拡張に伴い現在地に移された。

二 万松山「泉岳寺」 曹洞宗(東京都港区高輪)

本寺内には「四十七義士」の墓所も在り有名である。そこで今回は先ず同寺内の四十七士の墓について考えさせられた事より筆を起すことにした。

- 1、墓石の配列が親子、石高的序列を無視しているのは何故か。
 - 2、全員の「戒名」に「刃」「劍」の文字が加えられた理由。
 - 3、「寺坂吉右衛門」の墓は「曹溪寺」にも在るが「実墓」は？
- これら三点が今回の参詣で関係者への照会、史料の再検討の結果、氷解したので報告いたします。

墓地の手前には「吉良上野介」の首級を洗ったと伝えられる「首洗井戸」や、義士の活動を支えた義侠の商人「天野屋利兵衛」の碑があり先ず目に

風信

○二月三日は節分、四日は立春。十四日は旧正月元日・バレンタインデー・元宵祭・春一番も吹いたさうですね。

○二月三日・外務省からの連絡にもとづき、日本ポルトガル修好一五〇周年記念事業推進のため、長崎日ボ協会を中心に大村市センターに長崎県・長崎市・大村市・平戸市・西海市・南島原市の各代表との情報交換会開催。十月七日の長崎くんちを中心にポルトガル総領事も来崎されるとの事。

○三月一日(月)より本会主催の「長崎学講座」、毎週月曜午前十時半より開催。翌二日(火)同十時半よりは「長崎の古文書を読む会」開催。御自由に参加下さい(会費不要)

○次に昨年末より塾長の竹之下憲一郎さんを中心に毎週水曜午後一時半頃より「社会を語る」座談会が本会事務所であつております。これも御自由に御参加下さいとの事。(会費不要)

○NHK長崎文化センター所長の上村女史来訪。今年度も本会と共催し、県下文化財探訪を三月は大村・四月は島原・五月は上五島を中心を実施するとの事。特に上五島では国無形文化財上五島神楽実演見学する由(参加希望者は電話八一八七〇二二NHK文化センターまで)

○一月には次の本を御寄贈頂きました。
『小説・それでも龍馬がすぎ』本川次郎氏自著出版。龍馬と千葉道場の女剣師千葉佐那子を取りあげた本川氏らしい人物描写だった。(一、五〇〇円)
『偲誌』亡母(渋谷須磨子)七回忌を偲んでとあつた。私も若い頃渋谷女史には大変お世話になりました(渋谷翠他編集)

『上五島神楽』元上五島町教育長吉村政徳先生より贈られる。吉村先生は「神道文化奨励賞」をうけられている。
『歌集・百歳百首』著者の森瀬貞先生より。先生百才記念の歌集でした。先生お元気で何よりです。

『長崎初期キリシタンの一考察』私(越中哲也)の若い頃の著作を純心大学博物館より出版されました。一般書店にはありませんので御希望の方は本会事務所または純心大学博物館(電話八四六〇一〇二)まで。(一、二〇〇円)
○平成二十二年一月「ながさきの空」第二十一集」発行。御希望の方は本会事務所または十八銀行各支店まで(無料)

長崎歴史文化協会研究室

TEL八二二一五四〇
十八銀行公会堂前出張所2F

